

あべけいな  
○安部景奈, 赤松利恵 (お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科)

【背景・目的】食べ残しは給食指導の課題のひとつであり, その要因として好き嫌いがあげられる. 本研究では, 給食時間における好き嫌いの指導用教材を作成し, その実施可能性を検討した.

【方法】2010年11月~12月, 都内A区の公立小学校4校に通う1年生456名を対象に, 紙芝居教材による介入を行った. 介入の前後に質問紙調査および残食調査を行った.

#### 1) 紙芝居教材

行動科学の「自信」と「重要性」の概念を用い, 主人公が嫌いな食べ物を「工夫」して食べ, 残さず食べたことで起こる「いいこと」に気づき, 最後には, 工夫をしなくても食べられるようになるというストーリーを作成した. このストーリーを1日4枚で完結するように分けて5日分作成し, 給食時間などに短時間で実施できるようにした. 視覚的にもわかりやすく興味をひくようなイラストと色使いを心がけた. また, 指導者用に説明書を作成した. 紙芝居は各校の栄養士または学級担任, 研究者によって, 5日間, 給食時または授業時に実施された.

#### 2) 質問紙調査

①調査日の給食について, 「ぜんぶ食べた」「のこした」の2件法で自己申告させた.

②給食に嫌いな食べ物が出されたときの対応について, 紙芝居中に「工夫」する場面で登場する「はなをつまんで食べる」など7項目に, 「はい」「いいえ」の2件法で回答させた.

③嫌いな食べ物を食べようと挑戦しているかについて, 「はい」「いいえ」の2件法で回答させた.

以上のうち, ①②は事前・事後調査に, ③は事後調査のみに用いた. また, 事後調査では, 各校の栄養士および学級担任を対象に, 児童の

反応や変化, 今後の指導に役立つかなどについて, 評定法および自由記述法でたずねた.

#### 3) 残食調査

各校の学校栄養職員が, 質問紙調査と同日の給食について, 学級単位で料理ごとに残食重量を計測した.

事前・事後の変化を調べるため, 質問紙調査の回答については McNemar 検定を, 残食調査については Wilcoxon 検定を行った.

【結果】事前・事後調査の両方に回答した児童は434名であった(回答率95%). 嫌いな食べ物への対応については, 「さいしょにたべる」(事前61% v.s. 事後55%,  $p=.007$ ), 「おいしいとおもってたべる」(事前57% v.s. 事後45%,  $p<.001$ )と回答したものの割合が減少していた. その他の対応, 食べ残しの自己申告, 残食率[中央値(25, 75パーセンタイル値):事前3.0(0.5, 11.0)% v.s. 事後4.0(1.0, 7.5)%,  $p=.623$ ]については, 有意な変化はみられなかった. しかし, 自由記述の回答から, 「完食できる子が増えた」「嫌いな食べ物がないという人が自信を持った」など, 肯定的な意見が多くあげられた.

#### 【ラウンドテーブルでの検討課題】

(1) 本教材に対する意見

(2) 食べ残しを改善するための取り組み

学校関係者, 幼児・児童向けの教材に詳しい方の参加をお願いします.

(連絡先)

安部景奈 g1040523@edu.cc.ocha.ac.jp

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

お茶の水女子大学大学院

人間文化創成科学研究科 赤松利恵気付

Tel & Fax: 03-5978-5680